

# あいぽと通信

平成28年  
(2016)  
9月発行  
第38号

## トピックス Topics

- レポート: あいぽと ふれあい講座
- 特集: 様々な人権(災害と人権)
- 案内など

あいぽと徳島では、さまざまなイベントを開催しています!



千葉県に生まれ、東京の広告業界に20年。子育てに仕事にと忙しくしている中、当時の上司を通じて、廃校活用事業を知りました。3年前、視察で旧出合小学校へ訪れると、豊かな自然に出会い、この環境で仕事をしながら子育てをしたいと移住を決断。子どもには一人ひとりお互いの顔が見える少人数の学校もよいだろうとの思いもありました。

ハレとケデザイン舎は、三好市休廃校活用事業を利用し、山間にある旧出合小学校を、落ち着いた雰囲気と泊施設、工房などに見事に再生させ、大勢の人が集まる場所へと変えて活動しています。植本さんは次のように語ってくれました。

7月1日、三好市にある旧出合小学校(こうごう)「廃校を新しい「MINI」に活用したコミュニティづくりについて」と題して、第1回ふれあい講座を開催。ハレとケデザイン舎代表の植本修子さんに話を聞きました。

## ふれあい講座「衣食住を見直そう」の開催



移住してすぐに、都市からの若者の移住促進や雇用など地域活性化に取り組んでいる「NPO法人マチとソラ」を紹介されました。マチとソラの様々なサポートもあつて、地域の人たちの交流を深めることができました。小さなまちからこそ、地域に密着した活動ができることが嬉しいし、移住者や仕事づくりのプラットフォームとなるNPOがあることも心強かったです。また、三好市は高齢化率が高いですけど、都会からの移住者だけでなく、外国人も多く集まってきて多文化で魅力的なまちです。将来的には、地域資源を活かした観光ビジネスも考

えています。まずは、出合小学校に子どもたちが集まって、仕事をするともらえる「こども通貨」なども検討。そして、豊かな自然を活かした川遊びや自然塾を今年の夏から行っています。このまちに来て驚いたことは、子どもたちが山や川など外で遊んでいないことでした。地域の人たちと一緒に遊んで、家の中で遊んでいる子どもたちを自然の中で遊べるようにして、より多くの人たちが集える場所にしていきたいです。ハレとケは、柳田國男さんが見出した世界観や時間軸を表すもので、ハレは折り目、節目の非日常のこと。ケは日常です。ここ旧出合小学校に来て非日常の時間を味わってほしいです。



平成28年度

## 人権に関する児童生徒の作品 表彰式・発表会・展示会



### 〈表彰式・発表会〉

- 日時 / 平成28(2016)年12月4日[日]午後1時30分～
- 会場 / 徳島県立二十一世紀館「イベントホール」(徳島市八万町向寺山文化の森総合公園内)

参加無料

### 〈展示会〉 標語ポスター

- 日時 / 平成28(2016)年12月4日[日]～12月11日[日]まで実施。午前10時～午後4時 ただし、12月5日(月)は休館日、12月11日(日)は午後3時に終了
- 会場 / 徳島県立二十一世紀館「多目的活動室」

## ～アイヌの方々からの様々なご相談をお受けします～ ～アイヌの方々のための全国一斉電話相談を行っています～

- 相談は無料です。● 匿名でもかまいません。● 秘密は厳守します。

公益財団法人 人権教育啓発推進センターでは、アイヌの方々の悩みをお受けするフリーダイヤルを開設しております。嫌がらせ、差別、プライバシー侵害などのご相談もお受けします。お気軽にご相談ください。

- 受付 / 月曜日～金曜日(※祝日、12月29日～1月3日を除く)
- 時間 / 午前9時～午後5時



アイヌの人々は、シマフクロウをコタンコロカムイ(村を守る神)と考え、自然とともに大切に生きてきました。

相談専用電話 アイヌの方々のための相談専用フリーダイヤル

0120-771-208

※来訪によるご相談もお受けします。

月曜日～金曜日  
午後1時～午後5時(要予約)

公益財団法人 人権教育啓発推進センター

〒105-0012 東京都港区芝大門2-10-12 KDX芝大門ビル 4階

URL <http://www.jinken.or.jp/>

◆本相談事業は、(公財)人権教育啓発推進センターが、厚生労働省の生活相談充実事業として実施するものです。

### 人権相談のご案内

あいぽと徳島では、人権擁護委員・弁護士による人権相談を行っています。まずは電話にてご連絡ください。

Tel.088-664-3701

一人で悩まずお電話を

● 人権擁護委員による相談  
第2・第4土曜日(10:00～16:00)

面接相談及び  
電話相談

● 弁護士による相談(要予約)  
第1・第3金曜日(13:00～16:00)

面接相談

【編集・発行】

## あいぽと徳島

徳島県立人権教育啓発推進センター  
指定管理者 特定非営利活動法人ヒューマンライツ 文化・福祉ネットワーク

〒770-0873 徳島市東沖洲2丁目14 沖洲マリナターミナルビル内  
Tel.088-664-3719 Fax.088-664-3727

あいぽと徳島 検索 <http://www.ciport.jp>



徳島県立人権教育啓発推進センター(あいぽと徳島)は、開設10年目を迎えました。

● 開館時間 / 午前10時から午後6時まで ● 休館日 / 月曜日(祝日の場合はその翌日) 年末年始(12月29日から1月3日まで)

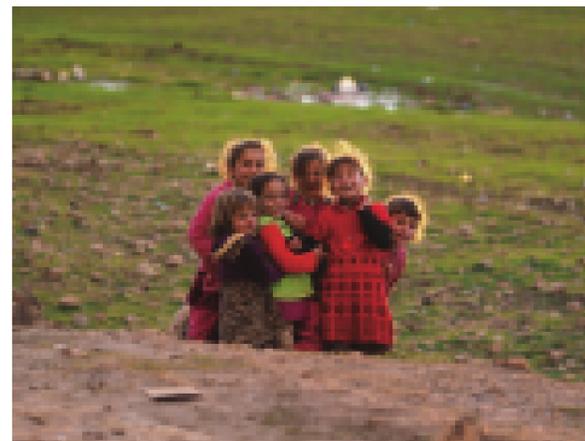
### 公共交通機関のご案内

JR徳島駅前から徳島市営バス【中央卸売市場】行きに乗車し、【沖洲マリナターミナル】にて下車。

■ 安田菜津紀さんの活動



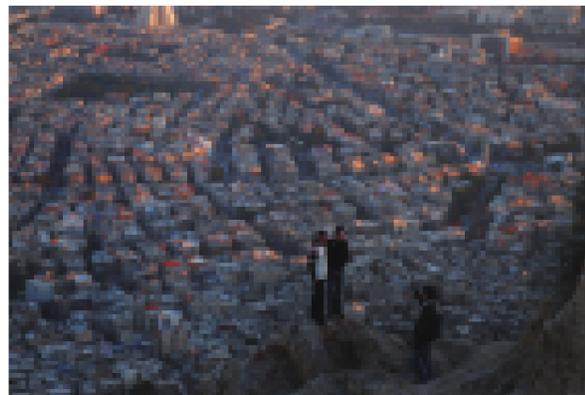
▲かつて7万本だった高田松原から、波に耐え抜いた一本松。(岩手県陸前高田市)



▲イラク北部、クルド人自治区。ISの手を逃れ、避難生活を送るヤズディ教徒の子どもたち。

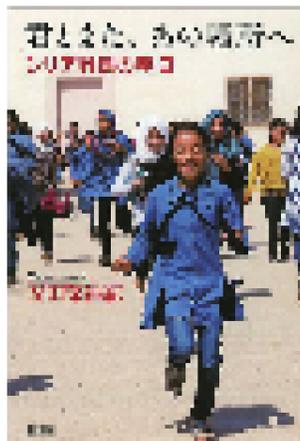


▲漁師・菅野修一さんの水揚げのお手伝いをする孫の修生くん。この日は水ダコが大漁だった。(岩手県陸前高田市)



▲2009年撮影 内戦前、カシオン山から眺めたシリア首都ダマスカス

■ 安田菜津紀さんの書籍



君とまた、あの場所へ  
シリア難民の明日  
新潮社

東日本大震災と同じ時期に、内戦が始まってから5年。2009年まで訪れていた、美しいシリアの街並み、イラクの少年との出会い、その後通っているヨルダンで出会ってきた、故郷へ帰る日を待つ人々。写真と言葉に、出会ってきた人々の息吹を込めました。



それでも、海へ  
陸前高田に生きる  
ポプラ社

あの日から、もう5年。あれだけ街を破壊した海、あれだけ人の命を奪った場所に、なぜ菅野さんはもう一度向かっていったのか。その背中を見つめるしゅっぱは、どんな風に海と共に生きてきたのか。そんな二人の息遣いを、感じてもらえるように写真絵本にしました。

特集



様々な人権〈災害と人権〉

第1回人権教育啓発リーダー養成講座 ●平成28(2016)年7月21日実施

講師

安田菜津紀さん

フォトジャーナリスト

講演内容

■「奇跡の一本松」が象徴するもの

東日本大震災後に有名になった、岩手県陸前高田市の「奇跡の一本松」をご存じでしょうか。かつてここは高田松原と呼ばれる日本百景のひとつがあつて、7万本の松林があつたそうです。その7万本が津波で流される中、1本だけ耐え抜いたのがこの松でした。陸前高田市には私の義父と義母が暮らしていました。陸前高田市は、かつての街の様子を想像できないくらいに建物がごっそり波にさらわれ、義母もまた震災で命を落としていました。

私が選んだ写真という仕事は間接的な仕事です。何枚シャッターを切つても瓦礫は取り除けませんし、避難所の人々はお腹いっぱいになりません。そう悩んでいた時、私が唯一シャッターを切れたのがあの一本松の写真でした。7万本の中に1本だけ残ったその姿は希望の象徴のように見えたからです。

新聞に掲載された写真を見た義父から、「他の土地から来た人にとっては希望の象徴に見えるかもしれないが、7万本の松と一緒に暮らしてきた自分たちにとっては波の威力を象徴する以外の何物でもない」と言われてハッとしました。自分が誰のために写真を撮りたかつたのか。シャッターを切る前に

もつと人の声に耳を傾ければ、義父の気持ちを傷つけることはなかったかもしれない。それを教えてくれた義父には今でも感謝しています。

■少しずつの持ち寄りで支える

震災から少し経った4月21日。陸前高田市の小学校で遅い入学式が行われ、私は記念写真の撮影でお手伝いさせていただきました。たつた2人の新入生でしたが、その2人のために多くの方が服や道具箱などを送ってくださった。前日まで掃除をしてくれたボランティアの方もいました。私ができるのは写真という小さな役割ですが、それぞれができることを少しずつ持ち寄り、この日みたくに乗りこえられる日があるかもしれない。自分の役割はどんなものを持ち寄れるだろう、という大切な気づきをくれた出来事でした。

■それでも、海へ

陸前高田市の漁港では、ふるさとを破壊して多くの命を奪った海に、二度は出ることをやめながらも、お孫さんの「じいちゃん獲ってきた白いお魚がもう一回食べたいな」という声に背中を押されて、再び漁に出るようになった漁師さんと知り合いました。家族や仲間を失ったことへの後悔は、この先消えていくものではありません。しかしこれからの生き方次第で、その後悔を減らしていくことはできるか



もしれないと教えてくれました。

私が今取材に足を運んでいる、シリア難民のキャンプでも同じことを感じました。シリアでは内戦が続く、国の人口の約半分が国内の他の場所、あるいは国外へと避難して生活しています。写真を撮ることしかできないと悩む私に、現地のNGOの方が「これは役割分担なんです。自分たちNGO職員は現地に留まり、避難民に寄り添って活動できるけど、ここで何が起きているのかを発信することは難しい。それがあなたにはできる」と言ってくれました。傷ついて逃れている人たちに、私達がどんな役割を持ち寄ることができると、しっかりとこれからも考えていきたいと思います。